

## 世界に誇る神戸港を築いた土木技師 森垣龜一郎

文・瀬戸本淳(建築家)



瀬戸本淳(せともと じゅん)  
株式会社瀬戸本淳建築研究室 代表取締役

1947年神戸生まれ。一級建築士、APECアーキテクト。神戸大学工学部建築学科卒業後、1977年瀬戸本淳建築研究室を開設。以来住まいを中心にして、世良美術館・月光園鶴臈館など、様々な建築を手がけている。神戸市建築文化賞、兵庫県さわやか街づくり賞、神戸市文化活動功労賞、兵庫県まちづくり功労表彰、姫路市都市景観賞、西宮市都市景観賞などを受賞



森垣 龜一郎(もりがき きいちろう)

工学博士

明治7年、兵庫県豊岡の生まれ。大阪市築港事務所技師を経て、明治39年大蔵省技師となる。明治40年から41年、欧米に出張。大正2年、神戸出張所在となり、大正8年、内務省技師を兼ねる。神戸市港湾部長、都市計画部技師長、土木部長となり、神戸や大阪の築港の工事に尽力した

写真提供／森垣胃腸科外科院長 森垣聰氏

に生涯を捧げた沖野忠雄の功績もまた、抜きには語ることができない。森垣は、このような偉大な人物の後援を受けたのである。卒業後、森垣は沖野の命で大阪の築港事業に携わり、神矢の娘で沖野の姪にあたるふみと結婚した。その後岡山県の大島にある採石場へ赴任する。

当時、神戸港では近代的な海運の実現に向け、約142万m<sup>3</sup>を埋め立て、3千m級の防波堤などを建設し、現在の第一突堤／第四突堤を築くという壮大なプロジェクトが動こうとしていた。技師としてのキャリアを積んだ森垣は明治39年のプロジェクトの建設責任者として、弱冠32歳で神戸へ赴任す

る。從来の工法では問題があることから、森垣はヨーロッパに派遣され、ロッテルダム港で採用されたばかりの当時の最新技術、ケーソン工法を学び神戸へ導入した。これは鉄筋コンクリート製のビルのように巨大な箱(ケーソン)を築き、中に土砂を詰めて沈めるもの。神戸に日本初のケーソンが備え付けられたのはロッテルダムでおこなわれた世界初の工事からわずか2年後の明治43年(1910)のことだった。ケーソン工法は神戸港築港工事を飛躍的に進め、その後の近代港湾建築のスタンダードになる。

森垣は約18年、神戸港築港事業に携わった後も神戸にとどまり都市計画に尽力、道路網

の整備や阪神電車の地下乗り入れ、茹藻島築造など手がけたが、昭和9年(1934)、職務中に倒れ帰らぬ人となつた。厳格でありながら愛情に満ちて人望厚く、謡曲をこよなく愛す粹人でもあった森垣龜一郎。彼の息子、森垣茂氏は「龜のようになつてゆつくりと、一步一步確実に進んで道を拓いた人生だった」と振りかえるが、人に現れる力いっぱいの輝きに心打たれるとき、拝みみたい心になる。森垣龜一郎なくして、今の神戸はないのだ。

そんな偉人と私が、思わずここで繋がっていたと知つて驚いた。そのお話は次号で…。

\*敬称略  
※森垣博士功績顕彰会「森垣龜一郎伝」、赤松啓介「神戸財界開拓者伝」、日本埋立浚渫協会ホームページなどを参考にしました。

神戸港は開港150年を迎えた。ご存じの通り、神戸港はもともと港としての好条件が揃っていたが、近代的な整備がなされなければコンテナ取扱世界になるなど世界的マンモス港としての発展はなかつただろう。

神戸港が「湊」から近代的な「港湾」に生まれ変わったのは、明治末期／大正初期におこなわれた「大築港プロジェクト」だ。今回はその先頭に立った若き技

術者、森垣龜一郎にスポットを当ててみよう。

森垣龜一郎は明治7年(1874)、但馬は豊岡で生まれた。5歳の時に父が急逝、貧しい生活を余儀なくされる。小学校へ通うと学業成績が抜群で神童とよばれるほどだった。という。彼に目をかけた校長の神矢蕭(かみや しやく)は、このままこの地で埋もれさせられるには惜しいと地元の名士、富田仙助に援助を懇願し快諾、龜一郎少年は14歳にし

て故郷を離れ、東京府尋常中学校／第高等中学校と名門で勉学に励んだ。ところが富田が事業につまづき学資を断たれ、卵屋で奉公するなど働きながら学び、不屈の精神で東京帝國大学土木学科に進学。神矢の弟で、大規模な河川改修や築港事業など土木事業で鍛錬を振るついた技師の沖野忠雄が助した。世界に誇る神戸港を語るとき、神戸を愛し、港づくり